『同志社大学英語英文学研究』24号（1980年3月）

書　評

Learning Another Language Through Actions: The Complete Teacher's Guidebook. James J. Asher. Los Gatos, California: Sky Oak Production, 1977 pp. 117

北　尾　謙　治

Audio-lingual Method の限界が明白となった1970年代，特にその後半に数々の新しい外国語教授法が世界的に注目されるようになった[1]。

この新教授法の中で，特に影響力の大きいのが，Silent Way (SW), Counseling-Learning/Community Language Learning (C-L/CLL) と Comprehension Approach (CA) であろう。CA には，言語教育の初期の段階で，徹底して聴解訓練をすることが効果があがることを確めた Postovsky の教授法[2]の他に，Graded Direct Method の Sen (tense)-Sit(uation) の考え方に動機づけや記憶域をも考慮した問答法，Sel (ection) を取り入れた "Sen-Sit-Sel" Technigue (Sens-It-Cell とも綴られる)[3]，Winitz の OHR Method[4] や Asher の Total Physical Response Approach (TPR) などが含まれる。これらの CA の教授法を中心に，米国では1970年代の後半には，聴解に関する研究や教材開発が盛んになり，言語教育界で一種のブームを引き起こしたことは TESOL の動向より知ることができる[5]。

この CA の中心をなすのが OHR と TPR であろう。OHR は，認知主義心理学や生成文法を直接に取り入れ，しかも行動主義に基づくプログラム学習を受け継いでいる。この教授法は静的な学習方法で，絵を見ながらテープを聞き理解する教材，*The Learnables* が既に我が国でも使用されている。

これと相反して，TPRは命令を聞き身体を動かしつつ聴解力，そして後には発話力をも養う動的な教授法である。TPR は教材化しにくいので OHR を高く評価しているのである。

従って，新教授法の中で，TPR は話す前に聴く時間を長くすることが SW や C-L/CLL と異なり，命令に従って身体を動かす点が他の CA の教授法と異っている。

SW や C-L/CLL と比較して，TPR はクラスで使用しやすいので，影響力が大である。チャート，ロッド，テープレコーダーなど何ら教具や機器は全く必要なく，教授者の訓練も SW や C-L/CLL に比較して容易である。

× × ×

本書の著者 James J. Asher 博士は TPR の提唱者である。心理学者であり，University of Washington で言語学，Stanfard Vniversity で教育心理学の研究を行い，Defense Language Institute (Postovsky の勤務校) でアラビア語の勉強をしたこともあり，現在は San José State University の心理学の教授である。TPR を使用して外国語を教える実地指導をしており，あらゆる年齢の学習者を扱い，言語もスペイン語，ドイツ語，フランス語，ロシア語，日本語，ヘブライ語，アラビア語と外国語としての英語に及んでおり，顕著な成果をあげている。

Asher は，国，軍，及び州からたびたび研究費を受け取り，言語習得の研究を TPR を通して行ってきた。その成果は，1965年頃より，*The International Review of Applied Linguistics, The Modern Language Journal* などの専門誌を通して発表されている[6]。この Asher の教授法は，以上のように10年余りに渡る実験や観察により有効なことが確かめられている。

本書はその教授法を解説し，それに基づいて外国語，とくに英語の指導ができるように試みたもので，その目的は序文の最初に次のように明確に記されている。

Well, it's finally completed. This book is intended for language teachers of children or adults who want a guideline for applying the "total physical response" in their day-to-day classroom instruction.

本書は TPR を応用して言語教育を行う教授者のための指導書であるが，"total physical response" という用語が上記1カ所でしか使用されていないのは興味深い。

Asher は子供の言語習得の過程より，外国語を学習するのに身体の動作を伴って学習する方がよい効果をあげることを確信している。実際の学習では，学年が上になるほど身体の動作が少なくなるが，これは間違いであると指摘している。

TPR では，最初は教授者の命令により，後には他の学習者の命令により学習者は行動をし，聴解を徹底して行い，除々に発話へと学習を発展していく。話すことは強制されずに自発的に行う。

Asher の上記の主張の根拠は，我々が言語学習の自然な過程で話す試みをする以前に，聞いて理解する期間が長いのを見落しているために，外国語学習が成功していないことである。これに関して，Asher は子供が意味のある文を言える前にかなり母国語を聞いて理解できるようになっていることを観察で確めている。

. . . listening skill is far in advance of speaking, For instance, it is common to observe young children who are not yet able to produce more than one-word utterances, yet they demonstrate perfect understanding when an adult says, "Pick up your red truck and bring it to me!" As far back as 1935 teams of investigators as Gesell and Thompson or Bühler and Hetzer have reported that when children learn their first language, listening comprehension of many complex utterances is demonstrated before these children

produce any intelligible speech.

We infer from these observations that it is no accident that listening precedes speaking. It may be that listening comprehension maps the blueprint for the future acquisition of speaking. (p. 3)

× × ×

本書は，I. The Problems, II. Most Often Asked Questions と III. Classroom Lessons の3章より成り立っている。第1章では，TPR の根拠と以前の研究成果を論じている。(pp. 1～16)

Asher は，学校において外国語を習得することが如何に困難であるかを具体的に数字をあげて説明し，その主な原因は，聞き話す時間が学校のクラスでは短かすぎるためである，としている。

Asher の言語習得の考えは，

1) 聞く技能は話す技能よりはるかに発達している。

2) 聞く力は将来の話す力を予言する。

3) 脳や神経の構造は，言語習得に関して，聞き理解することが，話すことより先に行われるようにプログラムされている。

この言語習得に関する基本的な考え方に立脚した TPR の言語教授の理論は以下のように要約されている。

Understanding the spoken language should be developed in advance of speaking.

Understanding should be developed through movements of the student's body. The imperative is a powerful aid because the instructor can utter commands to manipulate student behavior. Our research suggests that most of the grammatical structure of the target language and hundreds of vocabulary items can be learned through the skillful use of imperative by the instructor.

Do not attempt to force speaking from students. As the students internalize a cognitive map of the target language through under-

standing what is heard, there will be a point of readiness to speak. The individual will spontaneously begin to produce utterances.

(p. 4)

第1章の後半は以前の研究成果で，如何に TPR が効果をあげてきたかを証明している。彼自身の研究成果のみでないので，より客観的である。

研究成果は学習者とその場所により4種類に分けられている。クラスにおける子供，ラボにおける子供，ラボにおける成人，及びクラスにおける成人で，ラボにおいては種々な要因を規制して実験を行い，クラスでは観察が行われ，TPR が子供にも成人にも効果のあることが証明されている。

本書の目的は TPR の効果を理論的に論じるのではなく，実際にクラスに応用できるように解説することで，理論に関心のない読者はこの部分を飛ばすように指示しているが，TPR の理論的背景に関心のある読者には少し物足らない感じがする。

第2章は，Asher がよく受けた質問中42問とその解答を集録し，その解答を通して TPR の細部まで解説するように試みている。(pp. 17～35)

まず最初に，Asher は TPR はどの言語習得法よりもよく研究され，既に8ケ国語で成功していることを強調している。

TPR を使用する時の指導法に関する質問が多く，命令形以外は如何に教えるか，宿題はどうするか，1度に何時間教えるか，単語はどれ位ずつ導入するのがよいか，などの具体的な質問が多い。

質問は動機づけ，教師の訓練，クラス人数，クラスルームの設営の仕方など幅広い範囲に及び，この章を読めば，だいたい TPR の輪郭がつかめるように，上手に工夫されている。

第3章は，Carol Adamski が，18～69歳の日本人，中国人，韓国人，ギリシャ人，ロシア人やラテンアメリカ人に TPR を使用して，実際に英語を教授した53レッスン，計159時間のクラスの教案を Asher が修正したものである。本書の中心で，ページ数でも70%位を占めている。

使用言語が英語であり，非常に具体的に書かれているので，我々もよく読めば明日からでもクラスで使用することを可能にするのがこの特徴であろう。

各レッスンは同一のパターンになっていないが，主な構成は，復習，新しい命令文，その発展（新しい語いや文を接続したりする練習），新しい文法項目の導入方法，クラスでできる色々な活動，読み書きの順序である。必要に応じて省略される部分があり，時には視覚教材の使用法や指導上特に重要と思われることの注意などがある。語いや文型のまとめも必要に応じて取りあげられる。

本書を読み通せば，TPR の全容が理解できる。2度読めば TPR の特徴がかなり明確になり，部分的にはクラスへ応用することが可能となると思う。

TPR も他の新教授法同様学習者の立場に立ち，学習者が如何に言語を習得するかを十分に考慮した教授法である。学習者を何とか話せるように努力している。

この教授法は聴解を中心としており，その部分に関してはさほど批判がない。しかし，学習者が話すようになった段階での間違いの訂正方法と教授者の種々のフィードバックの仕方には多くの批判がある。Asher によると，学習者は話すことに注意を払っているので，教授者の間違いの訂正やフィードバックは頭に入らないばかりか，学習者の妨害をもしている。故に，それらは出来る限り少なくし，しかも，する時にはやさしくすることが大切である。とにかく，まず話させ，除々に完全な文を話すように指導するのが TPR の基本概念の一つである。

TPR の他の大きな特徴は，話すことは教えることが出来ないとの認識をしていることである。つまり，発話とは内面化された言語が現われたものの連続で，除々に形成され，完全になることを強制できない。母国語同様話すことで間違いはつきもので，除々に減るものである。故に，教えられるのは内面化される段階，すなわち聴解で，これを十分すればするほど発話はうまくいくと考えられている。

× × ×

1978年の6月にこの TPR のデモンストレーション[7]を初めて見た時，それほど珍しいとは思わなかった。動作をしながら言語を習得することは，Palmer[8]などによって半世紀以上前から語学のクラスで使用されている。私自身も同志社中学で初めての英語の手ほどきを，命令により動作をする方法でグイン先生より受けたのを今日でもよく記憶している。Asher の TPR は，以前の類似の教授法と比較して，聴解に非常に重点が置かれていること，背景の理論がしっかりしていること，しかも，子供のみでなく成人に対して効果があがることが実証ずみであることなどが本書で詳しく説明されていてよく理解できた。

Asher は本書により TPR の全容を明確に解説しているが，彼の提案通りにクラスを始めから終りまで行うかどうかは重要でないし，また彼自身もそう期待していないと思う。TPR は，どのようなクラスにでも部分的に取り入れられる。この TPR のとくに大切な点は教授者が今までに見落していた，言語教育において当然知らなければならない第2言語の習得の過程を指摘したことだと思う。Asher の理論は，言語教育界の多方面に渡って貢献するところが大きい。

TPR に関しては4本の映画もあり[7]，本書を読んでも万一 TPR がよく理解できない場合やより詳しく知りたい場合は参照されればよいと思う。

注

1. 1978年4月にメキシコシティーで行なわれた第12回 TESOL コンベンションまでに，これらの新教授法はすべて紹介された。新教授法に関しては，以下の文献を参照されたい。

   北尾謙治「新しい教授法と TESOL の動向」 日本英語教育学会 (ELS) 関西支部研究集録 3 (1980年3月) pp. 28–33.

2. Valerian A. Postovsky. "Effects of Delay in Oral Practice at the Beginning of Second Language Learning." *The Modern Language Journal*. Vol. LVIII, Nos. 5–6 (September-October, 1974), pp. 229–239.

3. James R. Nord. "Shut-up and Listen, A Case for Listening Comprehension." (mimeo), Learning and Evaluation Series, 17 Morill Hall, Michigan State University, East Lansing, Michigan 48824.

4. Harris Winitz. "Comprehension and Language Learning." in *On TESOL '78: EFL Policies, Programs, Practices*. ed. by Charles H. Blatchford & Jacquelyn Schachter. Washington, D. C.: TESOL, 1978.

5. Teachers of English to Speakers of Other Languages (TESOL) の最近の紀要 (TESOL Quaterly), 年次大会プログラム, 及び年次大会の主な論文を集録した *On TESOL* による。

6. James Asher 博士より入手した論文は以下のものである。

Shirou Kunihira and James J. Asher. "The Strategy of the Total Physical Response: An Application to Learning Japanese, "*The International Review of Applied Linguistics*. Vol. III, No. 4 (September, 1965), pp. 277–289.

James J. Asher. "The Learning Strategy of the Total Physical Response: A Review." *The Modern Language Journal*. Vol. L, No. 2 (February, 1966), pp. 79–84.

James J. Asher and Ben S. Price. "The Learning Strategy of the Total Physical Response: Some Age Differences." *Child Development*. Vol. 38, No. 4 (December, 1967), pp. 1219–1227.

James J. Asher. "The Total Physical Response Approach to Second Language Learning." *The Modern Language Journal*. Vol. LIII, No. 1 (January, 1969), pp. 3–17.

James J. Asher and Ramiro Garcia. "The Optimal Age to Learn Foreign Language." *The Modern Language Journal*. Vol. LII, No. 5 (May, 1969), pp. 334–341.

James J. Asher. "The Total Physical Response Technique of Learning." *The Journal of Special Education*. Vol. 3, No. 3 (Fall, 1969), pp. 253–262.

_____. "Children's First Language as a Model for Second Ladguage Learning." *The Modern Language Journal*. Vol. LVI, No. 3 (March, 1972), pp. 133–139.

James J. Asher, Jo Anne Kusudo and Rita De La Torre. "Learning A Second Language Through Commands: The Second Field Test." *The Modern Language Journal*. Vol. LVIII, No. 1–2 (January-February, 1974), pp. 24–32.

James J. Asher. "Children Learning Another Language: A Developmental Hypothesis." *Child Development*. No. 48 (1977), pp. 1040–1048.

Janet King Swaffar and Margaret S. Woodruff. "Language for Comprehension: Focus on Reading a Report on the University of Texas German Program." *The Modern Language Journal*. Vol. LXII, No. 1–2 (January-February, 1978), pp. 27–32.

7. 1978年6月17日に大阪外国語大学で開かれたJALT関西支部の例会にて，Aleda Krauseによりドイツ語を使用してTPRのデモンストレーションが行なわれた。

8. Harold E. Palmer and D. Palmer. *English through Actions*. London: Longman Group Limited, 1970.

9. TPRに関する映画は以下のものがあり，Sky Oaks Productions, 19544 Sky Oaks Way, Los Gatos, California 95030, U. S. A. より販売及び貸し出しが行なわれている。

Demonstration of a New Strategy in Language Learning

16 mm–black and white–sound–15 minutes–narrated in English

Strategy for Second Language Learning

16 mm–color–sound–19 minutes–narrated in English

A Motivational Strategy for Language Learning

16 mm–color–sound–25 minutes–narrated in English

Children Learning Another Language: An Innovative Approach

16 mm–color–sound–30 minutes–narrated in English